

ペーパーポット利用による苗播栽培

第3報 晩期栽培における育苗日数と移植時期との関係

橋本昭彦・猪山純一郎

(大分県農業技術センター)

HASIMOTO, A., IYAMA, J.

Rice cultivation by Broadcast seedling with use of Paper Pot
3. Relation between nursery days and cate of transplanting
in late season culture

紙筒を利用した苗播栽培は機械移植栽培に比較し4葉苗が得やすいため、晩期栽培の省力技術として有望視される。

しかし晩期水稻の前作物の収穫期は年次により変動し、一方水稻の播種はある時1度だけ行なわれる。したがって前作物の収穫が早まった場合、育苗日数の短い稚苗でも早く移植するか、中苗まで育苗日数を延ばして移植するか、どちらが有利かを検討した。

試験方法: 日本晴, ミネユタカを7月1日に播種し、移植は7月15日, 20日, 25日, 30日に行なった。栽植密度は㎡当り40株とし、本田の施肥量はa当りチッ素0.8kg, 燐酸1.0kg, 加里1.0kgとした。

試験結果: 移植時の苗は両品種とも、移植時期が遅れるにつれ、ほとんど直線的に大きくなった。

移植後の生育は葉令の進んだ苗を移植しても、移植期が遅れることにより、草丈は短く、成熟期の程長も短くなった。

しかし穂数は移植期で一定の傾向は認められず、移植期の遅れで必ずしも減少しなかった。これは移植期が遅れた場合、弱小茎の有効化する割合が高くなったため、

1穂粒数が移植期の遅れで減少していることからもうかがわれる。

登熟歩合は7月25日植まで両品種とも大差なかったが、7月30日植では低下が著しくなった。

収量も移植期の遅れで減収し、日本晴は直線的に、ミネユタカは7月25日植まではゆるやかに、7月30日植になると大きく減収した。また減収の仕方に品種間差がみられた。

収量と収量構成要素との相関は、穂数にはなかったが、1穂粒数(日本晴 $r=0.88^{**}$, ミネユタカ $r=0.82^{**}$)と登熟歩合(日本晴 $r=0.84^{**}$, ミネユタカ $r=0.94^{**}$)に正の相関がみられた。

このように播種期が同一の場合、葉令の大きい苗を移植しても移植期が遅れると、ある程度穂数を確保した条件でも、1穂粒数が低下し、減収した。とくに7月30日植は登熟歩合も低下し、減収が著しくなることが判った。したがって晩植の場合、葉令が小さくても早く本田に移植する方が有利で、日本晴よりミネユタカが適していると考えられた。

生 育 ・ 収 量 調 査 結 果

品 種	移植期 月 日	苗長 cm	苗令 L	草 丈 cm		茎 数* 本/㎡		出穂期 月 日	収穫期 月 日	稈長 cm	穂数* 本/㎡	1穂粒数 粒	登熟歩合 %	玄米重 kg/a
				8月 19日	8月 26日	8月 19日	8月 26日							
				日 本 晴	7.15	9.7	2.7							
	20	12.3	3.0	54.3	60.6	21.2	20.0	9.4	10.24	65.8	548	46.8	85.0	41.6
	25	15.0	3.7	47.3	61.5	20.8	22.4	9.7	11.8	63.6	553	40.4	86.8	40.6
	30	17.9	4.0	36.9	51.6	16.7	18.2	9.11	11.18	57.7	493	35.4	76.7	35.1
ミ ネ ユ タ カ	7.15	10.0	2.8	61.3	67.0	25.3	21.4	9.7	11.8	65.6	436	55.4	84.0	43.6
	20	13.9	3.6	56.6	66.5	21.1	19.8	9.7	11.8	64.0	456	54.9	86.1	44.4
	25	18.4	3.8	50.2	63.7	17.9	18.5	9.10	11.11	61.7	420	53.6	84.4	43.2
	30	21.5	4.1	40.0	54.6	16.9	19.8	9.13	11.18	56.6	494	49.4	75.1	38.1

注) 茎数は1区40株調査の2区平均値で示し、穂数は坪刈り(5㎡)調査より算出